

いもの子の歌

障害者が地域で暮らし、働くために

●第4回 この街で暮らしたい



▲筆者右端

川越いもの子作業所
大島宗宏

■初めての作業所での実践
この街で暮らしたい

一 この街で暮らしたい
母のいるこの街で
時の鐘がひびき 朝日がのぼる街
今ほくらが求めるのは
なくさめの言葉でなく
生きたいと叫ぶ 仲間の声に
耳をかしてほしい

二 この街で暮らしたい
きみのいるこの街で
蔵造りの屋根に
つばめが飛びかよう
今ほくらが求めるのは
安らぎの時間でなく
闘い続ける仲間につか
力かして欲しい

三 この街で暮らしたい
友のいるこの街で
赤間川が流れ せせらぎ光る街
今ほくらが求めるのは
なつかしい思い出より
未来に続くはるかな道を
探し求めたい

1987年から1990年までは、川越いもの子作業所の無認可の時代です。この頃は「川越いもの子作業所をささえる会」が運営母体でした。学校を卒業して行き場のない仲間たちは、柳沢民さんや町田詠司さん（5月号）のように重度の知的障害や行動障害をもつ人や、知的障害と肢体障害を併せもつ重症心身障害をもつ仲間たちでした。民さんや詠司さんたちは川越の街にリヤカー回収に出かけ、別の仲間たちは畳の間で木工や工場から出た電気製品の廃材のプラスチックのビニールがし作業をしていました。

暖かくなったある日、建物の外にある水場で民さんが水を出しながら靴を濡らし、靴底についた泥が落ちるのをじっと見ていました。そこに私が靴洗いのブラシを渡すと民さんは「ごしごしと」「大きなうた」を歌いながら洗っていきます。その姿を見て、私は職員やその家族からも靴を持ってきてもらって、民さんと靴洗いの作業を行いました。その頃は、職員もみんな初めての作業所の仕事だったので、じっとしているのが苦手で、刺激に弱い民さんが仕事をするイメージがなかなかもてませんでした。しかし、この靴洗いを通して、民さんと初めて感情を交流でき、民さ

んに合う仕事を見つけていこうという気持ちになりました。

■ビンではなく、缶だ

缶プレス機とリヤカーの寄贈があり、リヤカー作業がはじまります。民さんと私の散歩は、リヤカーでの缶回収へと変わりました。民さんは、リヤカーを引き、犬と散歩する人が通れば、指さしをしながら「イヌー、イヌー」「わん、わん」と言ってみたり、町中に出れば「バス、バス」「来たよ、来たよ」と話したりしながら、缶回収を楽しんでいます。

した。

自動販売機のある所を点々としながら缶を回収していきます。突然現れた、缶を改修するリヤカーの二人連れは、すぐに街に馴染んでいきました。あるとき、缶が入った一斗缶とビンの入った一斗缶を置いているお店があり、民さんはビンの入った一斗缶を持って勢いよくザッとリヤカーに入れようとしたのですが、ぐっとその手が止まります。民さんはその一斗缶を戻して、缶の入っている方を持ってきてリヤカーに移しました。「ビンではなく、缶だ」という選択を民さんがおこなっていました。その顔がとても凛々しく、そして集中していました。障害は重くても、矛盾とぶつかり、自分の知的な力で解決しようとする姿を初めて知りました。困っているときに、職員がなんでも解決の手助けをするのではなく、そのことで揺れたり迷ったりする気持ちに寄り添っていくことの楽しさを職員として知りました。

■街に居場所をつくる

2年目になって川越いもの子作業所は、川越市に場所を提供していただき、川越駅近くの東田町の官舎に場所を移しました。そして詠司さんが学校を卒業して入り、民さんにリヤカー回収の相棒が生まれました。今でも民さんは仲間の名前を自分から言うことはないのですが、詠司さんだけは「エイジー」と呼び、詠司さんはそれに「バッパー」「ダッター」と答えていました。川越の中心にある街は、入り組んだ道のなかに工場や作業場、お店もあって1時間も回ればリヤカーは缶と

段ボールでいっぱいになっていました。回収先に困ることはなく、民さんと詠司さんのひくりヤカーにみなさん好意的に缶や古紙を出してくれました。

ある日詠司さんは、仕事が終わって作業所の送迎の車を家の前で降りましたが、いつもいるはずのおばあちゃんが家にいなくてまた来た道を歩き出しました。いつもリヤカーで立ち寄っている作業着屋さんから作業所に詠司さんがいるとの電話がかかってきました。慌てて職員が迎えに行くにあんパンと牛乳を持った詠司さんがいすに座っていました。作業着屋さんのおばあさんがいつも回収に来る詠司さんが夕方歩いてくるので呼び止めて作業所に電話を入れたそうです。仲間たちはただ働いているのではなく、彼らの居場所をも街のなかにつくっていました。私たちは、街のなかで障害のある仲間たちが仕事をする確かな手ごたえと喜びを感じました。

■働いている真ん中に

民さんと詠司さんがリヤカーで回収をしている頃、東田町の作業所では木工作業をする上野さん、田中さんの2人と、電気製品から出たプラスチックのビニールはがしをする5人の重心の仲間たちが職員に体を支えてもらいながら畳の間で作業をしていました。16畳ぐらいの作業場に6台の車いすがあり、水分補給、排せつにゆったり時間をかけ、快の状態を大切にしようとしてくんでいました。食事の準備では職員が日替わり宅配弁当のおかずを重心の仲間のために食べやすいように刻みます。昼どきになって詠司さんと民さんが



▲無認可時代、みんなて記念撮影